

タイ・ビルマ国境・カレン民族解放区「メブレー管区」から現状報告

ビルマ政府と長年にわたって敵対してきた少数民族のカレン民族同盟(KNU)は、最近の政府軍の武力攻撃で「存亡の危機」に立たされているようだ。たの一五民族が政府と停戦協定を結んだ後も唯一、強硬姿勢を崩さなかったKNU。その解放区に入り現状を報告する。

### 勝ち目のないゲリラ戦

雨季に入ったばかりのタイとの国境は雨が少なかった。タイ北部・メーホンソン州のカレン人難民キャンプには、国境のサルウィン川を越えて、新しい難民の流入が続いている。国内の少数民族への人権侵害はないとする軍事政権の発表を疑わざるを得ない。私は難民とは逆に国境を越え、カレンの支配区に入った。解放区と呼ばれるメブレー管区を訪れ、もつとも印象深かったのは、半世紀に及ぶ武装闘争を続けてきたカレンの最後の「あがき」とさえ映る、勝

ち目のないゲリラ戦であった。

KNU第七旅団の司令部は、ビルマ政府軍の二つの前線基地に挟まれていた。政府軍とカレン軍の陣営は、歩いてたつた三〇分、約四km離れているに過ぎない。双方を隔てているのは、カレン軍側が埋めた無数の自家製の地雷である。

ティー・マウン司令官(六八)に支配地区の詳細地図を見せてもらい、状況説明を聞くうち、かなりまづいなど感じた。これまで何度となく解放区入りし、前線へも足を運ぶ取材を繰り返していたが初めて感じたことだった。夜一〇時近く、口ウソクの灯りの下で話を聞いている最中も、山向こうで八一mm迫撃砲の爆発音がし、空が真っ白になった。数年前まで、約一二〇〇〇名の兵士を抱えていたカレン軍は、現在、多く見積もっても約四〇〇〇人に減っているであろう。徴兵ではなくあくまでも志願兵だが、先の見えない戦闘に対しての厭戦とカレン指導部への不信で多くの兵士が武器を置いた。

弱体化したとはいえ、三年前までKNUの総司令部はビルマ側にあ

り、兵士たちは「いつかビルマの土地にカレン州をもつんだ」という強い民族意識い支えられていた。しかし、一九九五年一月に総司令部が陥落し、新たに展開した司令部も今年二月に失った。「民族の誇り」だけで戦えなくなっている。

司令部から歩いて五時間半、メブレー管区の村に足を踏み入れた。しかし、解放区とは名ばかり。近辺に迫る政府軍を警戒し、別の部隊と絶えず無線連絡。三時間と同じ地点にとどまることはできなかった。

目的地の村に行くにも、待ち伏せを避けて遠回りをし、往路と復路の道を変える必要もあつた。移動中はいつ政府軍が攻撃して来るかと緊張がつきまとつた。村が襲われたとしても、カレン軍側は反撃するには兵士も武器も十分で、村の外からゲリラ戦をするしかない。

### 「けもの道」の両側は地雷原

カレンの村への道は険しい。歩きやすい道はすべて政府軍に押さえられ、ジャングルの急な崖や川の中を

## 平和への解決策、見つからず

△写真キャプション▽

歩くしかない。八〇センチ幅の「けもの道」の両側はほとんどが地雷原だ。暑さと疲労でふらふらになり、何度となく道をそれ、地雷原に入ってしまった。汗が冷や汗に変わる。命を奪うためではなく、傷つけるための地雷だと分かっているも不気味だ。こんなところで足を吹き飛ばされれば、十分な手当を受ける前に出血多量で死んでしまう。

カレン軍はゲリラ戦に突入する数年前まで、地雷の埋設場所を地図にするし、計画的に撤去していた。今、その余裕はない。ビルマ軍を遠ざけるため、いたる所に地雷が埋められている。もちろん地図への印もなされていないようだ。

前線を移動中、カレン兵部隊長マナ（二八）は、「地雷を使って戦闘を続けるのは、確かに国際法違反で、海外からの支持を得られないかも知れない。でも、今自分たちに残された道はこれしかないのです」。目をそらしながら申し訳なさそうに話す彼。言外に私たちの立場を理解して欲しいといっているように思えた。

軍事政権が示した停戦の条件は、カレン軍の武装解除である。軍事的にも経済的にも追いつめられたKNUにとつて、交渉の切り札は何一つない。敵対の歴史的から、政府軍を信じて武器を置くことに恐怖は大きい。前線の兵士も、村人も、難民キャンプに逃げ込んだ人も、誰もが平和を欲している。「最後の一人になっても戦闘をやめる気はない」と言い切る司令官の言葉は、どれだけ現実的なのだろうか？

前線を移動中、カレンの友人と毎晩話し込んだ。「われわれカレン側にはこの戦いの止め方が分からない。政治的な交渉をどのように進めていけばいいのか教えて欲しい。第三国・機関による調停は可能はないのか」。いつも最後に彼から出された問いだ。

・武器も底をつき、地中から掘り出した第2次大戦中の英国軍の機関銃を整備する老兵。

・食料も乏しく、自給自足せざるを得ない。大蛇も大切な食材だ。

・国境の川を下り、前線から司令部へ戻るカレン兵たち。